

キリスト教教学講読B****<オリエンテーション>****A. テーマ：キリスト教思想の基本文献を読む**

本講読は、キリスト教思想における基礎文献をじっくり読むことを通して、キリスト教思想研究とその方法について学ぶことを目的としている。後期は、キリスト教思想の古典というべきテキストを英語で講読するが、その際に、まとまった分量のテキストから問題（テーマ）を取り出し、必要な調査（文献レベルでの）と分析が行われる。

また、この講読は、キリスト教教学専修に所属の学部生の卒論演習を兼ねており、研究発表の機会を設けることが予定されている。

今年度は、H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture*, Harper Perennial, 1951(2001) を読む。

- ・キリスト教思想をその古典から学ぶことによって、今後キリスト教思想のさまざまな研究テーマに取り組むための基礎力をつけることができる。
- ・まとまった分量のテキストから自分で問題を見つけ出し、さらにそれに取り組むための方法論を身につけることができる。

B. テキスト

H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture*, Harper Perennial, 1951(2001)

C. 成績などについて

- ・平常点による。（受講者には、数回の発表担当を課するが、その発表内容と、毎回の演習への参加度とから総合的に判断する。）
- ・使用するテキストについては、Kulasis に PDF ファイルをアップする。
- ・参考文献：授業中に紹介する。
- ・受講生には、キリスト教思想に対する関心と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火3・水3）を利用するか、メール（アドレスは、Kulasis にて確認）で行うことができる。

D. 授業（予習＋出席・発表＋復習）の進め方**1. 演習担当者の役割**

- (1) 授業前：読み・訳す・分析する → 問題点・補足事項。
- (2) 授業での発表：順番に読み・訳す。質疑。討論。
- (3) 授業後：残った問題を検討する。 → 次回の冒頭でまとめと補足。

受講者全員は、それぞれの担当箇所について、テキストを精読し、その要点・概要をまとめ、関連事項について調査、討論すべき問題点の明確化を行った上で（これらを記載したレジメを作成すること）、演習に出席することが望まれる。また、自分の担当箇所以外についても予習を十分に行い、討論に積極的に参加することが必要である。

2. 次回：参加者へのテキストの配布と担当順番の確定。レポート課題の件。導入講義2。
3. 三回目以降は、テキストを最初から、担当者の解説を通して、順番に精読してゆく。

E. スケジュール

- ・オリエンテーションと導入：10/3, 10
- ・テキスト演習：10/17, 24, 31, 11/7, 14, 28, 12/5, 12, 19, 26, 1/9, 23
- ・キリスト教学学部生の卒論演習：11/21（11月祭）, 1/16（金曜日授業）

<導入講義1：H.リチャード・ニーバーについて>

<H・R・ニーバー>（Helmut Richard Niebuhr, 1894-1962）

アメリカの神学者。R・ニーバーの弟。『教派主義の社会的起源』（29）を出版。30年、バルトラの弁証法神学に触れる。31年、イエール大学でキリスト教倫理。『アメリカにおける神の国』（37）、『啓示の意味』（41）、『キリストと文化』（51）など。歴史に顕現する超越神と出会う人間が、終末論的共同体としての教会を形成しつつ、歴史と文化を変革する応答的実存であることを強調する、応答と責任の倫理学を展開。G・D・カウフマンら。
（『岩波キリスト教辞典』より、アレンジ）



- ・弁証法神学と同世代のアメリカ神学を代表する思想家。
- ・社会科学との接点に特徴。
- ・イエール学派の伝統形成。カウフマン、ガスタフソン、コックス・・・。
- ・『徹底的一神教主義と西洋文化』（60）、『責任を負う自己』（63）
- ・Richard R. Niebuhr (ed.), *H. Richard Niebuhr. Faith on Earth. An Inquiry into the Structure of Human Faith*, Yale University Press, 1989.

- ・東方敬信『H・リチャード・ニーバーの神学』日本基督教団出版局、1980年。

第一部 H・リチャード・ニーバー神学の形成

第一章 ヘルムート・リチャード・ニーバーの生涯

第二章 自由主義神学の遺産

第一節 自由主義神学とは

第二節 自由主義神学のタイプ

第三節 トレルチとニーバー

第三章 宗教的リアリズム

第一節 宗教的リアリズム

第二節 D・C・マキントッシュとニーバー

第三節 ティリッヒとの対話

- ・ドイツ的体系的な神学に対するアメリカ神学：
 - 哲学的伝統の差異、経験主義・プラグマティズム
- ・自由主義神学の伝統、社会科学への関心

（1）自由主義神学の継承

- ・自由主義神学・トレルチの視点と方法論

1. キリスト教の歴史的類型

トレルチの『社会教説』：教会／セクト／神秘主義の三類型



1. ニーバー『アメリカ型キリスト教の社会的起源』

（*The Social Sources of Denominationalism*, 1929. ヨルダン社。）：

アメリカ型キリスト教としての「教派」(Denomination)

「教派、教会、セクトは、社会学的な集団である。そして、それらは、原則として社会階級の秩序に適合しながら分化してゆくと考えられる。もちろん、教派が宗教的目的を有する宗教集団であることを否定するとしたらその主張は過りである。しかし、教派は、確かに宗教が階級体系に同調していることを示している。そのため、教派は、教会に対するこの世の勝利とキリスト教の世俗化との象徴である。そして、教派は教会の福音が非難している、あの分裂を教会が承認したことの象徴なのである。」(31)

2. 類型論的思考方法、諸類型

・ *The Kingdom of God in America*, Harper, 1937.

The Sovereignty of God / The Kingdom of Christ / The Coming Kingdom

・ *Radical Monotheism and Western Culture*, Harper, 1943.

Monotheism / Henotheism (social faith) / Polythesim

・ *Christ and Culture*, Harper & Brothers, 1951..

Christ Against Culture / The Christ of Culture / Christ Above Culture / Christ and Culture in Paradox / Christ the Transformer of Culture

・ *The Responsible Self*, Harper & Row, 1963.

man-the-answerer / man-the-citizen / man-the-maker / man-the-law

(2) 信仰論と社会科学

・ *Faith on Earth. An Inquiry into the Structure of Human Faith*, New Haven/London, 1989.

(ed. by Richard R. Niebuhr)

3. 『地の上の信仰』

・「信仰の現象学」(編集者の解釈): 複数の自己が相互作用からなる社会とそこに成立するコミュニケーションの場(信仰が成立する場)において、主観主義(信仰は客観的な現実とまったく関わりない、たとえば、単なる主観的な願望の投影)と客観主義(信仰を信仰対象の神からのみ理解しようとして、主体の状況という要因を完全に消去可能とする)の抽象性を排しつつ信仰現象が反省される。アルフレッド・シュッツの現象学的社会科学の意味における現象学。

↓

・「反省の方法」: 信仰者が現に行っている「信じる」という行為を批判的に吟味すること。信じるという行為自体の自己批判的検討を出発点として信仰の基本構造を解明する。

cf. 客観的所与としての聖書のケリュグマから出発する立場(一種の聖書主義)

神との出会いにおける実存的あるいは主体的な決断から出発する立場(一種の実存主義)

↓

他の自己(他者)とのコミュニケーションという相互主観的場における信仰。

5. ブーバーの対話主義に対して:

ブーバー『我と汝・対話』(岩波文庫)

第一部:

「世界は人間のとる二つの態度によって二つとなる。人間の態度は人間が語る根源語の二重性にもとづいて、二つとなる。根源語とは、単独語ではなく、対応語である。根源語の一つは、〈われ—なんじ〉の対応語である。他の根源語は、〈われ—それ〉の対応語であ

る。」「したがって人間の〈われ〉も二つとなる。」(7)

「根源語〈われ—なんじ〉は、全存在をもってのみ語る事ができる。根源語〈われ—それ〉は、けっして全存在をもって語る事ができない。」(8)

「経験される対象の世界は、根源語〈われ—それ〉に属している。根源語〈われ—なんじ〉は、関係の世界を成り立たせている。関係の世界をつくっている領域は三つある。」(11)

「愛は〈われとなんじ〉の〈間〉にある。」(23)

「愛は〈なんじ〉に対する〈われ〉の責任である。」(24)

「〈なんじに働きかけつつあるわれ〉、〈われに働きかけつつあるなんじ〉」(31)

「世界は人間の二つの態度によって、二つとなる。」(43)

「人間は〈それ〉なくしては生きることはできない。しかし、〈それ〉のみで生きるものは、真の人間ではない。」(47)

第二部：

「二種類の間があるのではなく、人間性の二つの極があるのみである」、「この二重の〈われ〉」(83)

第三部：

「さまざまな関係を延長した線は、永遠の〈なんじ〉の中で交わる。それぞれの個々の〈なんじ〉は、永遠の〈なんじ〉へのかいま見の窓にすぎない」、「ただ絶対に〈それ〉にならない〈なんじ〉と直接関係にはいるときにおいてのみ、完全になる。」(92)

「神の名が讃美される時、それはたんに神について語るのではなく、神に向かって語っているからである。」(94)

「神との間においては、絶対的排他性と絶対的包括性とが一つになる。」(98)

「神は〈全き他者〉である」、「圧倒するような〈恐るべき神秘〉であるとともに、わたしの〈われ〉よりもはるかにわたしに近い自明の神秘である。」(99)

「この世界における個々の真の関係は、個別化による。この個別化は関係するものの喜びとなる。なぜならば、このような個別化だけが、相互の差異を認識できるようにするからである。」(125)

「人間と人間の関係は、本来、人間と神の関係の比喩である。」(130)